
闇の歌姫

ナベリウス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇の歌姫

【Nコード】

N0085BA

【作者名】

ナベリウス

【あらすじ】

人より外見が少し変わっているからというだけで迫害を受けていた少女がひょんなことから異世界にきてしまつてそこで魔物の中でも1位、2位を表すほど強いとされているドラゴンと出会い保護される。

それから少女は人としてかけてしまった感情を取り戻していくお話です。

処女作ですので何か不快に思うことも多々あることと思いますがそこはご了承くださいだきたいと思います。

第1話 プロローグ

私はいつ頃からここにいるのだろうか？ 思いだせない。

「おい！ 見ろよ！ あそこにいるのバケモノじゃないか？」

「本当だ！ バケモノだ！ おいこっちくんはよバケモノ！」

どうしてみんな私のことをバケモノっていうんだろう？ 私何もしてないのに。

「っ！」

1人の男の子が投げた石がちょうど私の頭に当たった。

「当たった当たった！」

男の子たちはそれを見て笑っている。私は感情のない目で男の子たちを見た。

「なんだよその目は！ バケモノのおまえがいけないんだろ？！」

そう男の子たちは私に言って去って行った。どうして？ 私何もしてない。しようとも思はない。なのにどうしてわかってくれないの？ どうして私を見てくれないの？ もういや！！ みんな・・・みんな・・・

っガバ！！

「ハアハアハア・・・ゆ・・・め・・・？」

夢なんて久しぶりに見た。いつもはそんな夢見ないのに。急にどうしてこんな夢見たんだろう？

気分が落ちてきた！　こういつときは歌うのに限る！

「~~~~~♪」

30分、1時間くらい歌ったところで満足した私はまだ寝室にいることに気付いて慌てて寝室から出る扉まで向かってあけた。

だがそこに広がっていたのはいつも見ていた廊下ではなく森の中だった。

「は・・・？　いやいやいやありえないって！　だってここ普通に家だったでしょ？！　何？！　なんで？！」

私はテンパっていて後ろに誰か（？）がいることに気づかないでいた。

「・・・誰だ？」

私は急にかかった声に驚いて後ろを振り向くとそこにいたのは今まで物語の中ででした見たこともない生物がいて目を見開いた。

第1話 プロローグ（後書き）

主人公は迫害を受けていましたが明るい性格の持ち主です。
まあそこはお気になさらず！

第2話 異世界にきちゃった（前書き）

前回は以外にも短かったなので今回は長めにしたいと思います。

第2話 異世界にきちゃった

私は目を見開いたまま相手を見た。

大きな体に人間を簡単に飲み込んでしまえそうなほど大きな口。そこから納まりきらないほどの鋭くとがった牙。それから何もおも貫かんとする堅そうな真っ黒な鱗。

どこからどう見ても物語上でしか存在できないはずのドラゴンがそこにはいた。

『もう一度問おう。貴様はどこからきてどうやってこの森に入った？』

え・・・？ええええええ！！も、もしかして今ドラゴンが喋ったの？！ドラゴンって喋れるの？！喋れないよね？！私の知っているドラゴンは喋れなかったよ？！って知ってるって言っても物語上のことで・・・

私がテンパっている間に返答がなかったのを答えないと取ったのか機嫌が悪くなっていくドラゴン。グルルウと呻り始めた。

私は急いで答えようとしたが自分の今置かれている状況をいまいち理解していないためかなんと答えていいのかわからない。とりあえずは何か答えないと・・・

「え、えっと・・・ここは・・・どこ・・・なんでしょうか・・・？」

『何？貴様はここがどこだかもわからずに踏み込んだというのか？』

表情まではわからないけどどこか呆れを含んだ声だった。

『ここはアスファラ大陸に存在する禁忌の森だ。』

呆れながらも説明してくれた言葉に私は絶句した。

アスファラ大陸ってどこ？禁忌の森？も、もしかして・・・いやいやいやそんなこと絶対あり得ない！だってそれは小説の中だけのことでだし実際にあったことだなんて聞いたこともないもの！でもそうだとすれば今の状況がすべてつじつまがあう。

「私・・・異世界にきちちゃった・・・？」

私がぼそつとこぼした言葉を聞いたのかドラゴンは驚愕（？）した。

『まさか・・・とは思っておったが本当だったとは・・・この世界ではまずこの森には人間は絶対に足を踏み込まん。・・・ふむ・・・貴様名はなんという？』

少し考えたかと思うと急に名前を聞いてきた。私は本当の名前を名乗っていいのかわからなかったがどうしてか目の前にいるドラゴンは信じられた。

「私の名前は鈴原美羽。えっと・・・あなたのお名前も聞いてもいいですか？」

目の前にいるドラゴンはまさか自分も名前を聞かれるとは思ってなかったのか少し目を見開いていた。だがそれもすぐにおさめて言っ

た。

『我の名は本当は人間には教えたくないのだが・・・ふむ、ミウと言ったか、お主に興味がわいた。我の名はアスターク。ミウ、異世界からきたと言っていたが行くところはあるのか？ないのならば我と一緒にくるといい。』

私はドラゴン、アスタークの言葉に驚愕した。私を見た人は避けるか無視するか罵ってくるかのどれかだったからだ。

私が驚愕しているとアスタークは不思議なものでも見るかのような視線を私に送ってきた。

『なんだ？行くところがあるのか？』

私はその声に我に返って言った。

「え？私と一緒にいてくれるの？私と家族になってくれるの？」

ってうわああああ私何言っちゃってるの？！ばかあああああ！！
！何ドラゴンに向かって「家族になってくれるの？」っておかしいでしょ！！絶対私おかしい子になっちゃってるよ〜〜ど、どうしょ・
・

『なんだ？ミウは家族がほしいのか？なら良い。我とともに暮らすのだ。好きなようにするといい。』

う・・・そ・・・？ずっと、ずっと欲しかった家族になってくれるって・・・どうしよすごいうれしい！

私は気がついたらアスタークに向かって笑顔を向けていた。

第2話 異世界にきちゃった（後書き）

はい！無理やり2人（？）の出会いを締めくくらせていただきました！

ほんと無理やりで申し訳ないです。想像力がほしい・・・
なんで？とかは思つかも知れませんがお許してください！
想像力&文才がないんです；；

ま、まあーとりあえずお付き合いありがとうございました。

第3話 旅立ち（前書き）

アスタークは実際人間の言葉をしゃべることはできませんが主人公は言っていなかったですが前の世界で動物の言葉がわかっていたのでそれを知ったアスタークはいまでは魔物の言葉で会話しています。

第3話 旅立ち

私とアスタークが家族になって半年がたった。

最初のうちはサバイバルになれていなくて苦労したけど半年たった今では慣れたもので苦労はまだ少し残るけどアスタークという家族がいるから幸せに暮らしている。

そういえば最初アスタークの家に行った時はびっくりした。だってアスターク、女性で子供がいたんだもの！　じゃべり方からして男性だと思ってたから余計びっくりしちゃった。アスタークは『人間みたいに雄だ雌だという感覚は我等にはない』だそうです！　種族が違うだけでこうも考え方が違うのだと思い知らされた時でもあった。

そしてなんと！　アスタークはこの世界で1位、2位を争うほど強いんだって！　それでアスタークより強い魔物って誰？　って聞いたら『この大陸にはいないが他の大陸にフェンリルがいる』んだって！　ぜひ機会があつたら会ってみたいな

そして今現在、私が何をやっているかというアスタークとヨアン（アスタークの子供）に歌を披露します！　なんでか一回口ずさんでいたみたいでそれを聞いたヨアンが気に言って毎日毎日歌ってと言われてたので今では日課になった。

『うむ、いつ聞いてもきれいな歌声だ。ずっと聞いていても飽きぬな』

『うん！　きれーなの！　ミウの歌はキレー！』

歌い終わった私に2頭は言った。いつも歌い終わった後に言ってくれる言葉で聞きなれているけどやっぱり言われるとうれしいものだ。

「ありがとう。前は自己満足で歌ってたけど聞いてくれる人がいるだけでこんなにも違うものなんだね。」

私は心からの笑顔を2頭向けた。それを眩しいものでも見るかのように目を細めたアスタークが言った。

『ミウよ、話がある。』

私はいつもは聞かない真剣な声にいやな予感がしながらも頷いた。

『ミウよ、我はおまえに世界を見てもらいたいと思っておる。』

言われた私は最初言っている意味がわからなくて唖然としてしまったが徐々に自分の中にアスタークの言った言葉がしみ込んできて気づいたら叫んでいた。

「どうして?! 私・・・私このままでいい!! ここにいたい!!」

私は今にも泣き出しそうな顔をしてアスタークに訴えた。

『・・・我はおまえをいじめたいわけではない。ただ短い人生をこんなところで歩んでほしくはないのだ。我らと違って人の子はあつという間にその人生を終わらせてしまふ。その前におまえには世界を見てほしいと我は思っておるのだ。』

その言葉を聞いた私はここまで自分のことを考えていてくれていたなんて思わなかった。初めて会った時は無理やり家族になってしまつて迷惑をかけていると思つていたから余計に今の言葉は私の心に響いて目から涙がこぼれてしまった。

「でも・・・でも私見た目がこんなだし・・・誰も受け入れてくれなかったらつて思うと怖い・・・」

そこまで言つとアスタークは短いため息をもらした。

『何を言つておる。おまえはこの森から出たことがないからこの世界の人間を見たことがないからわからんだろがこの世界からしたらお主の銀の髪に赤い瞳はなんら不思議ではないぞ』

嘘・・・だつて銀の髪に赤い瞳だよ？！ この外見がなんら不思議じゃないつて・・・他の人はどんな感じなの？！ ちょ、ちよつと興味がわいたかも・・・だけどここまでお世話になつて迷惑までかけたのに興味がわいたからつて出て行くのはどうなんだろう・・・。

『クツクツクツク・・・お主はすぐに顔に出るな。そう不安な顔をするな。おまえは私の娘だ。偽りはない。親にとつて子には旅をさせたいものだ。興味があるのであれば行つてくるといい。そして帰りたくなつたら帰つておいで。待っているから』

アスタークはやさしい声で私に言った。涙が止まらないまま私は何度も何度も頭を縦に振つた。それを見ていたアスタークは私のところにまで来てくれてやさしく壊れ物を扱うかのように頬につたつた涙をなめてくれた。

『もう泣くな。我はどうしたら良いのかわからぬ。』

苦笑い混じりに言われたので私は笑顔になつて答えた。

「私この世界を見てみたい！ 人に触れてみたい！ ごめんなさい・
・拾つてもらつて恩もまだ返せていないのに・・」

『おまえが謝ることはないよ。我が先に言いだしたこと・・行つておいで我とヨアンはここで帰ってくるのを待っているから』

私はその言葉に胸が熱くなるのを感じて何度も何度もありがとつて口にした。

翌日私はアスタークと一緒に森の出口まで来ていた。

「じゃあ・・行ってくるね！」

『ああ・・行つておいで。』

私はやさしい言葉をもらつてアスタークに教えてもらつた近くにある村まで歩いた。

第3話 旅立ち（後書き）

っていうことで今回はミウが森の外に出るまでの話を載せました。
ええ！ミウちゃん、もう一度人とかかわってみようと決断をくだしました！

そしてヨアンが空気になっていた件ですが気にしたらだめです！（笑）

第4話 家族との再会

あれ？そういえば不思議だったんだけどどうしてアスタークは旅に必要な物一式もっていたんだろう？後、時々違う服もあったし・・・まあ、いつか！今は旅を楽しもう！って言っても一晩野宿して順調に歩いて行けば村に着くって言うてたし大丈夫よね！

「それにしてもこの世界にきて1人になるのは初めてかも・・・ちよつと不安かも・・・いやいやいやだめよ！！今からこんなんじやこれから先やっていけない！がんばるのよ私！！」

と自分に喝を入れてるときだった。遠くのほうに2mはありそうな3匹の狼（？）に襲われている馬車を見つけた。

どうしよ・・・一応アスタークからは自分の身は守れる程度は戦い方を教えてもらったけど人を守るってなると不安かも・・・

そんなことを考えていたせいで狼（？）に見つかってしまった私はパニックになりながらもどう切り抜けようか考えていた。

急に目の前が暗くなったのでハッ！って我に返った時は遅すぎた。

・・・あれ？

『久しぶりだな〜ミウ・・・元気にしてたか？』

その声には聞きおぼえがあった。2ヶ月前まで私が歌っている時に聞きに来てくれていた・・・

「・・・レクイ・・・？」

私がそういうとうれしいかったのか左の口角を上げた。相変わらず器用なことができるのね・・・時々人間みたいって思うときあるし。

「レクイ、今まで何してたの！！いつも来てくれていたから二ヶ月？くらい前からこなくなつて・・・すごく心配したんだから！！」

涙目になつて上を向きながら言うとしんどったような顔をして言った。

「悪かった。だが仕方のないことだったのだ。急にフェンリル様に呼ばれてな行かなければいけなかったのだ。」

「ふうん・・・ってフェンリル様？！フェンリル様に会えたの？！」

私がそういうとレクイはうれしそうに言った。

「ああ、会ったぞ！ フェンリル様もおまえに会いたがっていた」

フェンリル様が私に会いたがっている・・・？なんで？まあー会えることには変わらないからいいけどでもなんでだろ？

私が相当不思議な顔をしていたのかレクイが話してくれた。

「実はフェンリル様におまえの歌声が素晴らしいとポロつと言ってしまったのだ。そこで興味を持ってしまって会いたがっているのだ。今回呼ばれたのもその件だったなあー」

となぜかしみじみしながら言った。これは喜んでいいのか呆れるベ
きなのか・・・ってそれどころじゃなかった！

「それは少しの間おいといて、何やってるの！！馬車を襲うなんて
！」

と憤怒しながら言うのとレクイは困ったように言った。

『最初に襲ってきたのはあの人間どもだ。我らが襲う、とても思っ
たのだろう、我は早く帰りたいから無視しようと思ったのだが
あいつらが・・・』

レクイは最初のほうは困ったような声だったけど最後のほうは呆れ
声になって視線を馬車のほうに向けた。私もつられて見る。他の2
匹はレクイの子分なんだけど考えが足りないというか知識が足りな
いと言ったほうがいいのか・・・いい子たちではあるんだけどレク
イがらみになると手がつけられないのよね。

など私がまた思考にとらわれているとレクイがそつえば、と言っ
てきたのでまたレクイに視線を戻した。

『どうしてお前がここにいるのだ？森からはここから結構離れてい
るだろう？』

「あ！それはねアスタークが私の人生は短いか今のうちに楽しんで
来いって言うて旅にささせてくれたの！」

私がそういうとなるほどっと言いたげな顔をした。

『そうか・・・確かここから近い所は王都、アトラスだったな。もしかしておまえ歩いて行く気だったのか？早くても2日はかかるぞ。』

呆れたようなびっくりしたようなそんな感じの声だった。だって歩くしか移動手段ないし・・・などなど思っていると顔に出ていたのかレクイがため息交じりに言ってきた。

『王都の近くまでなら乗せて行つてやる』

その言葉に最初びっくりしたけどうれしさが込み上げてきて抱きついた。

「ありがと～～レクイ！今度お礼するね！」

それで話は終わったとしても言うかのようにレクイはまだ馬車を襲っている2匹に向かって遠吠えをした。それから数分もたたないうちに2匹が私たちの元まで来た。

『兄貴～呼んだ？』

『呼んだ？』

という2匹に今までのことを話し先に森に帰るように言った。最初レクイから離れるのを嫌がっていた2匹だったがレクイが一睨みしたことで2匹は森あるだろう方向に向かって走って行った。

『まったくあいつらは・・・んじゃ行くか？』

私がコクリと頷いたのを見て乗りやすいようにとしゃがんでくれた。

それに風魔法を自分にかけてふわりと浮かんだあとレクイの首元まで行って降いた。それを確認したレクイは私が振り落とされないようにと気遣いながら走りだした。

王都かあゝ最初に行く私以外の人がいる場所・・・少し緊張するけど大丈夫！だってアスタークが言っていたもん。おまえをいじめるやつはいないって。だから大丈夫！今だってレクイがいる。

しばらくして自分がうれしさのあまり馬車の存在を忘れていたことに気づいて沈んだという話はまた今度つということ。

第4話 家族との再会（後書き）

はい。魔法の存在を書くのを忘れていました。
ありますよ！魔法！

次こそ王都の話に入ります！

第5話 王都に到着（前書き）

更新遅くなってすみませんでした。

こんな小説にお付き合いいただいてありがとうございます！

第5話 王都に到着

出発してから半日で王都の近くまで着いた。

『ここからしばらく歩くと王都の門が見えてくる。ここま行ってもいいが面倒だからな・・・このまいけば・・・な・・・』

「何？その含みのある言い方。他にも方法があるの？」

不思議に思って聞いてみる。するとレクイはニヤリと笑って答えた。

『ん？あるぞ。おまえも知らないことがな・・・』

い、いったい何？！何があるって言うんだろう？私が眉間に皺を寄せて呻っているとレクイは声を出して笑った。

『くつくつく・・・ほんとおまえを見ていると飽きない。・・・答えは俺が人間の体になればいいんだ。』

一瞬何事もないかのように言うから聞き逃すところだった。人間の体になる？！

「そんなこと可能なの？！」

少し声を上げて言うとまた笑い出した。私がムスツとしていると『悪かった。』と言って話し出した。

『俺ら上位にいる魔物になれば人の擬態をとることは可能になる。』

だがいつも以上に魔力がなくなるがな。まあ俺なら1日くらいどうってことはないだろう。』

へえ、魔物にもやっぱり位とかつてあるんだね・・・そんな的外れなことを考えていると一瞬光ったかと思っただけで目の前にいたのはまだ10代後半くらいで黒い髪に金の目、整っている顔立ちだけどこか近寄りがたい雰囲気さをさらしだしている青年がそこには立っていた。

「どなたですか?!」

思わず聞いてしまった。私は悪くない!こんなにカッコいいなんて聞いてないもん!!

「おまえは・・・はあ、もういい。俺だ。レクイだ。」

目の前にいる青年は何か言いたそうにしたが次の瞬間には諦めたような表情をして言った。

「や、やっぱりレクイなんだね・・・っていうかレクイ何歳なの?」

私が驚いた感じで聞いた。

「俺は・・・128歳だ。魔物の中では若い方だな。」

ひゃ、ひゃくにじゅうはっさい?!住む世界が違っただけでこうも寿命までもが違っなんて・・・異世界&魔物・・・恐るべし!!

など馬鹿なことを考えているとレクイが歩き始めた。

「このままじゃ夜になる。行くぞ。」

と前を向きながら言った。私はそれもそうだなって思っておとなしく着いていくことにした。

第5話 王都に到着（後書き）

ええ！今回は短いです！ごめんなさい……許してください！

次回は長めにしますのでww

第6話 町におでかけ

レクイと一緒に歩きながらキョロキョロしていると手を握られた。
びっくりしてレクイを見ると

「迷子になりかねん。後転びそうだ」

など保護者全開で言われました！ええ！私は子供ですか！！ムスっ
となっているとレクイが立ち止った。

「ここだな。入るぞ」

そう言っすたすたと入って行っった。もう少し外見見たかったのに。
・私は店員さんとレクイが話し始めたのを見た後周りを見ることにした。

周りは意外ときれいで掃除が行き届いてる。カウンターの右隣を見ると通路があつてそこからおいしそうな匂いがするからきつと食堂ね！そして左側を見ると部屋が通路の両方にあるからきつと部屋か。
・など考えていると店員さんと会話を終えたレクイが戻ってきた。

「・・・もつと落ち着きというものを身につける。はあ・・・まったく」

ええええ落ち着きがなくてすみませんねーだ！私は頬を膨らませてそつぽをむいた。それを見たレクイはやれやれと言いたげな表情をした後言った。

「膨れてないで行くぞ。部屋はこっちだ。」

そう言いながら歩きだしたレクイの後ろを膨れながらも歩いた。

しばらく歩いて部屋を見つけたのかその中に入って行ったレクイを見て私も続いて入った。

「悪いな。部屋は1つだ。後は部屋がいっぱいなんだとさ。まあーベットもちょうど二つあるしいいだろ。」

「うん。別に？いいんじゃない？」

私がそっけなく返すとはあーと何度目かの深いため息が聞こえた。

「いい加減機嫌なおせ。どうしたら機嫌をなおしてくれる？」

ん〜どうしよっかな〜あ！そうだ！私は思いついてレクイに向かって言った。

「今日はもう日が暮れちゃったから明日町を見に行きたい！」

私がそういうとレクイは呆れた顔をしてくれたけど了承してくれた。私は満面の笑みをレクイに向けた。

あれから何事もないまま翌日！

私は起き上がって両開きの小窓に向かい勢いよく開けた。んゝいい天気！これはもう神様が出けなさいって言っているのね！そう思い隣に目を向けた。

そこにはもう一つのベットがあつて人1人が入っている膨らみがあった。私は躊躇せずにそのベットに近づき勢いよく飛びついた。中からぐうって声がしたけどきにしなゝい！

「起きて起きて！！朝だよゝ早く早くゝ行こう！！」

私がそういうと布団の中から不機嫌丸出しのレクイが出てきた。

「おまえは少しは自分の行動を考えてから行動しろ！！！」

ぶゝぶゝそりやゝ寝ているところ飛びついたのは悪かったけどそこまで不機嫌になることないのにー！そう思つて頬を膨らませた。

「いいじゃん！楽しみだつたんだもん！」

私がそういうとレクイは起き上がつてベットからでた。出るときため息ついてたけど・・・癖になつちやつたのかな？

レクイが聞いたら速攻で否定しそうだ。そんなことを考えているうちに扉を出ていく後ろ姿を見て急いで追いかけた。

それから朝ご飯を食べて洋服をお出かけ用の服に着替えていざ出陣

！んゝ楽しみ！！それに誰かこうして出かけるのも初めてだしね！

私は満面の笑みをレクイに向けて手をつなぎながら街に突撃した。

町にはいろいろなものがあつた。雑貨にレストラン、防具店に武器屋、後は喫茶店にお洋服屋さん！すごいすこいすこいある！！

私ははしゃぎながらレクイを引っ張って行つた。するとレクイが根を上げ始めたので休憩することにした。

「落ち着きというものを買ってこい！！そして自分の辞書の中に書き込め！！」

「まあーそんな怒なくなつたっていいじゃんゝ血圧あがるよ？」

誰のせいだ！とブツブツ言い始めたレクイをほおっておいて頼んだ紅茶を飲んだ。それを見たのかばかしいとでも言いそうな表情でレクイも飲み始めた。

「ミウ、これからどうするのか考えているのか？」

「んゝ実はこれと言って何も考えてません。」

苦笑いをしながら下を向くと前のほうからため息が聞こえた。

「おまえのことだからそうだとは思っていた。とりあえず2ゝ3日はここに滞在する。1日では回りきれん！」

その言葉に顔を上げるとやさしい顔をしたレクイがそこにはいた。

「~~~~っ・・・大好き!!」

私がそう言いながら飛びつくとだから後先を考えろ~~~~っという絶叫が町中に響いたとか響いてないとか（笑）

第6話 町におでかけ（後書き）

そんなこんなで第6話終了です！

王子様・・・どこで出しましょう。

それとミウちゃん17歳ですよ？一応。子供っぽいのは仕方ないのですよ・・・

許してやってください（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0085ba/>

闇の歌姫

2012年1月7日01時47分発行